

《シャボン玉》 二〇一〇年 帝京大学書道研究所蔵
 シャボン玉飛んだ
 屋根まで飛んだ
 屋根まで飛んで
 こわれて消えた
 シャボン玉消えた
 飛ばずに消えた
 うまれてすぐに
 こわれて消えた
 風風吹くな
 シャボン玉飛ん
 ばそ

あがって行って
 帰って来ない
 ふうわりふ
 わり
 シャボン玉飛ん
 だ (野口雨情)

《伊豆のはる》 二〇一一年 帝京大学書道研究所蔵
 一夜に山に雪つみ
 我か宿のにはの
 簗朝雨のふる大
 浪に傾き走る
 我か船のまに見
 えつ、富士は晴れ
 たり軒ことに梅
 の花咲き乾ひ
 たるかれ田のさとに
 今日雪ふる (若山牧水)

《たに水》 二〇一二年 帝京大学書道研究所蔵
 朝つく日さ なも
 しこもりた しらぬ
 るたにの瀬の 低山つ、
 うつまく きけふ
 みつ、心 こえて
 静けき 遠き浅間を仰き
 暮せり 仰きつ、心寒け
 (若山牧水)

《旅》 二〇一二年 帝京大学書道研究所蔵
 今日もま
 た心のかね
 をうちな
 らし打
 鳴らしつ、
 あくかれ
 てゆく (若山牧水)

《静淵》 二〇一三年 帝京大学書道研究所蔵
 遠くきて寝ぬる
 この宿静けて
 夜のふけゆけ
 は川音きこゆ
 かた空に凝りあ
 る雲の下陰に
 長きをひけり
 富士の裾壁

やすそ野に
 來り仰く時い
 よ、したしき
 山にそありけ
 る (若山牧水)

《白梅》 二〇一五年 帝京大学書道研究所蔵
 軒毎に梅の花咲き乾ひたる
 枯田の里は今日は雪降る
 しらくと枝に咲きみち梅の花
 煙よふもとに立ては明るし
 鬱悒(み)て見れば辺りの低山に
 白梅のはな咲きてしつもれり
 曙の小暗き藪の奥深き仄
 佛(ほのか)なるかも白梅の花 (若山牧水)

《炎》 二〇一五年 帝京大学書道研究所蔵
 おもひみよ ああ
 青海なせる くちつけ
 さひしさに 海そのままに
 つ、まれみつ、 ひはゆかす
 こひ燃ゆる 鳥翔ひな
 みを真昼日の から死せはてよ
 ひかり 今
 あおきに
 もえさかる
 炎かかなし
 わかわかさもゆ (若山牧水)

上野アーティストプロジェクト2020 「読み、味わう現代の書」

Ueno Artist Project 2020: "Experiencing the World of Japanese Contemporary SHO"

作品リスト

会期 二〇二〇年十一月十八日―二〇二一年一月七日
 会場 東京都美術館 ギャラリーA・C
 主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館
 協力 産経国際書会、一般財団法人毎日書道会、読売書法会
 後援 朝日新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社
 ・出品番号と展示順は必ずしも一致しません。
 ・会場内の湿度、照明は作品所蔵者の貸出条件に従い管理しています。ご来場の
 方々に理想的と感じられない場合もございますが、ご了承ください。



中野北溟

《一》 一九六一年 個人蔵

《よろこび》 一九八九年 作家蔵

《先生の手》 二〇一二年 作家蔵
 先生の手にほうたいがまいてあった わたしは
 「そのけがどうしたの」ときこうと思った でも
 言えなかった「先生そのけがどうしたの」わたし
 は心のなかでそっときいた (不詳)

《天地創造》 二〇一四年 作家蔵

《流水の詩》 二〇一五年 作家蔵

流水の詩 北溟の彼方に奏でる 北溟
 《舞》 二〇一五年 作家蔵

《刻む》 二〇一八年 作家蔵

刻む 時を刻み 天空に己を刻みこむ 北溟

《空へ(源鬼彦)》 二〇一八年 作家蔵

空へ 囀や時は 無限といふ空へ 源鬼彦の句 北溟

《うれしくって(棟方志功)》 二〇一九年 作家蔵
 うれしくって ありがたくて アバレルヨ
 棟方志功のひと言より 北溟

《ぬくもり》 二〇二〇年 作家蔵

ぬくもり 心ゆさぶる大きな大きなぬくもりこそ
 が愛なのでは 北溟

《はれやか》 二〇二〇年 個人蔵

はれやか 万象を包むはれやかなその博大なる時
 空の生成をば 北溟

《ガラス戸》 一九六七年 大東文化大学蔵

おふろのが
 ラス戸は
 ぼくの黒板
 かん字のれ
 んしゆうを
 したり
 (オバQ)を
 書い
 たり

たのしいな
 つぎの日にな
 るときれいに
 けしてある
 だれが

けすのかな (水町博史詩)

《翠亭躁态冊》 二〇〇〇年 大東文化大学蔵

廣大 (禅語)

鳥ぐもり採點辛かりし舊師（鷹羽行行）
住みついて路のたう（種田山頭火）

女は酒すこしまゐるがよし（佐久間象山）
居りたる舟に寝てゐる暑かな（与謝蕪村）
あふみ舟かや 月のかたぶく（閑吟集）
砲身は起き上つてふた、び砲架に座ろうとしていた（丸山薫）

よろつのことむかしにはおとりさまにあさくなり
ゆくよのすゑなれどかなのみなむいまのよはい
ときはなくかしこくなりたる（枕草子）
一世のうち秀逸の句三五あらん人は俳者なり十
句に及ばん人は名人なり（松尾芭蕉）
あまり花やかなる事は長からず（落窪物語）
いうぜんとして山を見る蛙哉（小林一茶）
櫓の聲波ヲうつて腸水ル夜やなみだ（松尾芭蕉）
赤人

も、しきのおほみやひとはいとまあれやさくらか
さしてけふもくらしつ
たゞみね
春はなほわれにてしりぬはなさかりこゝろのとけ

き人はあらしな（和漢朗詠集）
故郷やよるもさはるも茨の花（小林一茶）
いづれの藝も下手の名をとるべし（武野紹鷗）
人の生くるはパンのみによるにあらず（聖書）
歌はたゞ一言葉にいみじくも深くもなるものには
べるなり（藤原俊成）
野に著いては展敷す紅錦繡 天に當つては遊織す
碧羅綾（和漢朗詠集 小野堂）
およれ、、、（閑吟集）

春風の鉢の子一つ（種田山頭火）
人はみなよしの、山へいりぬなりみやこの花にわ
れはとまらむ（山家集 西行）
あふぎのかげで目をとろめかず（閑吟集）

瓜食めば子ども思ほゆ 粟食めばまして思ばゆ
何処より来たりしものぞ
眼交にもとなかりて 安眠し寝さぬ

19 《大伴旅人の歌(万葉集)》 二〇二〇年 作家蔵
和可則能尔 宇米能
波奈知流
比佐可多能

阿米欲里由吉能
那河列久流加母
わがそのに うめの
はなちる
ひさかたの
あめよりゆきの
ながれくるかも

20 《額田王の歌(万葉集)》 二〇二〇年 作家蔵
茜草指
武良前野逝
標野行野守者不見哉
君之袖布流
あかねさす
むらさきのゆき
しめのゆき のもりはみずや
きみがそでふる

をむなどものみてわらひければよめる（兼法師）
かたちこそみやまかくれのくちななれこゝろは、
なになさはなりなむ（古今集）
人に勝たんことを思は、學問してその智を人にま
さらんと思ふべし（徒然草）
じだじだじだじだをふむ（隆達小歌）
かんこ鳥は賢にして賤し寒古鳥（与謝蕪村）
渚白い足出し（尾崎放哉）

岡美知子

14 《葛飾の(下総国歌・万葉集)》 二〇一五年 作家蔵
可豆思加乃
麻萬能宇良未乎
許具布祢能
布奈妣等佐和久
奈美多都良思母

葛飾の 真間の浦廻を 漕ぐ舟の
舟人騒ぐ 波立つらしも
15 《つつじ》 二〇一八年 作家蔵
わたしはひとしづくの涙 ひそかに流された涙の
そのなかの
いちばん赤い 深紅の哀しみ 土のなかに深く深
く浸みとおつて 四月ふたたび よみがえったの
わたしはどなたかが零した血の一滴 あの川 こ
の川の 水底によこたわり

小山やす子

21 《伊勢物語屏風》 二〇〇二年 成田山書道美術館蔵
むかし男うひかふりして平城の京春日のさとし
るよし、て……

22 《三十六人家集屏風》 二〇〇三年 成田山書道美術館蔵
きのふこそとしは暮れしかはるかすみかすみの山
にはや立ちにけり……

23 《山家集屏風》 二〇一五年 毎日新聞社蔵
山桜 かすみの衣 あつくきて
このはるたにも 風つゝまなん
吉壁山 やかて出てしと おもふ身を
花ちりなはと 人やまつらん
白河のはるの梢の うくひすは
花のことはを きくこ、ちする
今よりは 花見む人に つたえおかむ
世をのかれつゝ、山にすまむと
月を見て 心うかれし いにしへの
秋にもさらに めくりあひぬる
よるもすから 月こそ袖に 宿りけれ
むかしの秋を 思ひいつれは
何事も かはりのみ行く 世のなかに
おなしかけて すめる月かな
雲はる、あらしの音は 松にあれや
月もみとりの いろにはえつゝ、

風にいつも洗い濯がれ 濯がれて むかしむかし
の空の匂い 陽の匂いに
めざめたの タルレ タルレ チンダルレ*
すべての山河に満ち溢れるチンダルレ
*チンダルレ―つつじ（姜恩喬詩 茨木のり子訳）

16 《坪野哲久の歌》 二〇一九年 作家蔵
曼珠沙華の
するどき象
夢にみし
うちくだかれて
秋ゆきぬべき

17 《多摩川に(東歌・万葉集)》 二〇二〇年 作家蔵
当麻河伯尔 佐良須豆久利
左良左良尔 奈仁曾許能兒乃
己許太可奈之伎
多摩川に さらす手作り さらさらに
何ぞこの児の ここだかなしき

18 《瓜食めば(山上憶良・万葉集)》 二〇二〇年 作家蔵
宇利波米婆 胡藤母意母保由
久利波米婆 麻斯提斯農婆由
伊豆久欲利 积多利斯物能曾
麻奈迦比尔 母等奈可利堤
夜周伊斯奈佐農

榎倉香邨

24 《百舌鳥と蛙》 二〇〇四年 帝京大学書道研究所蔵
ケタタマシク
物干台のてっぺん
から巻雲の
天に向かつて
ケタタマシク鳴い
てるその下の
土の中で
もうろうの蛙
が眼をさました（草野心平）

25 《芳潤》 二〇〇九年 帝京大学書道研究所蔵
あさつくひ ふるさとの尾鈴の山の をり
うすきもみちの かなしきよ 草山に膝を
山にて あきもかすみのたなひき いだきてまん
り土も てをり蠟燭のとも まろに
ぬくみて るにもにむ 眞赤きあきの
ひよとりの 朝つくひかなしき山を 夕日を
啼く わがあゆみ そみる（若山牧水）